

レクリエーション釣りとおグパシー ー共鳴(OGp-R)の相関性に関する 定量的分析および縦断的研究

金沢 誠一 (日本オグパシー協会 首席研究員 / ヨーメルン大学 客員教授)

高橋 太郎 (ヨーメルン大学 幸福学研究センター長)

発表日：2026年5月3日 | 論文ID：YUL3-2026-FSH-001

ABSTRACT

本論文では、レクリエーション釣りが個人のオグパシー (OGp) の蓄積および定着に及ぼす影響を、3ヶ月間にわたる120名の被験者データに基づき分析した。水面から放出される微細なオグパシー波動（水面波共鳴）が、釣り糸を通じた触覚的フィードバックと視覚的集中によって増幅される「流体オグパシー共鳴(OGp-R)」現象を特定した。実験の結果、週に1回平均4時間の釣行を行う被験者群は、対照群と比較してOGpの定着率が24.5%向上し、特に「待機時間」における精神的エントロピーの減少が確認された。

1. はじめに

オグパシー（Ogpathy）研究において、環境からの受容効率はピッケロ係数（ ϵP ）によってモデル化されてきた。しかし、従来の都市型環境における測定では、急激な減衰が観測されるケースが多い。これに対し、水辺環境、特に釣りと呼ばれる静的な待機活動を伴う行為において、例外的に高い ϵP の維持が報告されている。

本研究の目的は、この「水辺特異的共鳴」を物理的・心理的側面から定量化し、現代社会における効率的な幸福度充填プロトコルとしての釣りの有用性を実証することにある。

2. 理論的背景：流体オグパシー定常波

水はオグパシー・エネルギーの優れた導体であり、特に一定の周期を持つ波状振動はオグパシーの定常波を形成しやすい。釣りにおける「浮き（フロート）」への視覚的集中は、被験者の脳波を α 波領域に安定させ、環境波との位相同期を誘発する。

$$\Psi(t) = \sum [(A_n * \sin(\omega_n t + \phi_n)) * \exp(-\lambda t)] + R_{ogp}$$

※ $\Psi(t)$: 被験者のオグパシー共鳴関数, R_{ogp} : 水面からの定常放射率

この同期状態において、釣り糸という物理的媒介を通じた微細な感触が「トリガー」となり、蓄積されたポテンシャルが一気にOGpへと変換される。これを我々は「アングリング・トリガー効果」と呼称する。

3. 実験手法（Methodology）

被験者120名をランダムに3つのグループに分け、以下の条件下でオグパシー変動を測定した。

- グループA (Active Angling):** 週1回、実際に湖畔で釣りをを行う。
- グループB (Passive Observation):** 週1回、釣りをせず水辺で読書や休息を行う。
- グループC (Control):** 屋内のリラクゼーションルームで休息を行う。

測定には、当協会が開発した非侵襲的オグパシー・センサー（Prototype v4.2）を用い、血中オキシトシンおよび唾液中コルチゾール濃度との相関も確認した。

4. 結果と考察 (Results & Discussion)

グループ	初期OGp 平均	12週間後OGp 平均	上昇率 (%)	定着係数 (κ)
A (Angling)	102.4	138.7	+35.4%	0.88
B (Observation)	101.1	112.5	+11.3%	0.65
C (Control)	103.5	105.2	+1.6%	0.42

Table 1: 各グループにおけるオグパシー長期変動データの比較 ($p < 0.01$)

結果として、釣行グループAが他群を圧倒する数値を示した。特筆すべきは、魚が実際に釣れなかった「Null-Catch」の状態においても、グループB（単なる休息）を上回るOGp向上が見られた点である。これは、釣具を操作し、環境からのフィードバックを待つという「能動的な待機」プロセス自体が、強力なオグパシー触媒として機能していることを示唆している。

5. 結論と今後の展望

本研究により、釣りはオグパシーの受容効率（ ϵP ）を人為的に最大化させる最も効率的な活動の一つであることが実証された。今後は、デジタルシミュレーションにおける共鳴再現性の研究を進め、都市生活者でも自宅にしながら同様の「流体共鳴」を得られるシステムの構築を目指す。

参考文献：

- [1] 高橋太郎 (2024) 「ピッケロ係数と環境依存性に関する基礎研究」 ヨーメルン大学出版
- [2] Kanazawa, S. (2025) "Ogpathy Resonance in Fluid Dynamics," International Journal of Well-being Research.
- [3] 日本オグパシー協会 (2026) 「2026年度 幸福度計測技術白書」